

の地区編集委員に参加するなど、調査・研究の発展に緊密に協力し合っている。天気予報に密接に関係する研究・調査が学会の場でより広く議論され、その結果が現場にフィードバックされるという観点から「研究時報」と「天気」の相互関係について議論があってもよいのではなかろうか。

(当時：(財)日本気象協会 山岸米二郎)

参考文献

- 松野太郎, 1996: 上手なビッグサイエンスを, 天気, 43, 7.
 沖 大幹, 1995: 気象予報士と日本気象学会, 天気, 42, 249-250.
 高谷美正, 1995: イギリスで新しく刊行された雑誌「Meteorological Applications」について, 天気, 42, 28.

山岸会員の提案についての「天気」編集委員会の見解

はじめに山岸会員が「天気」の内容の充実について建設的な提言を寄せられたことに対し、編集委員会を代表して心からお礼申し上げる。会員の要望に応じて誌面の充実を図ることは編集委員会の主要な任務であることは申すまでもないことで、現在の委員会も歴代の委員会と同様に「天気」の内容充実に関して真剣に議論を続けている。しかしながら、具体的にその成果が反映されているかどうかとなると、残念ながら必ずしも十分とはいえないかも知れない。

そのような反省も含めて上掲の山岸米二郎会員の『「天気」編集への一つの提案』については編集委員会で検討させていただいていた。まだ最終的な見解の取り纏めは出来ていないが、とりあえず中間的な見解を付記しておきたい。

山岸会員も述べているように天気の内容充実についての提言は過去にもなされているが、残念ながら現状はこれに充分には応えているとはいえない。歴代の編集委員会も何とか会員の要望に応じて一層の内容の充実を実現しようと努力してきているが、諸々の事情で思うようには進んでいない。

まず読者に現在の天気の内容構成を再認識していただくために改めてその紹介をしよう。「天気」の投稿規定は各号の巻頭に掲載されているが、1991年から詳細な「投稿および内容案内」を各巻の1号巻末に掲載して投稿に便宜を図っている。

「天気」の任務としては、言うまでもなく学会の機関誌としての役割がある。学会活動についての情報の提供や学会員の活動要請は学会を円滑に運営するための最も重要な要素である。しかし、その性格上無味乾燥な内容であることも少なくなく、魅力ある誌面の要素ではない。これらについては概ね「学会だより」と

して取り扱っている。

「論文」や「短報」は、気象集誌が英文論文で構成され国際的な学会の顔であるのに対し、学会における唯一の和文による論文に誌面を提供する役割を果たしている。色々の考え方があろうが、現時点ではこのことを変更する必然性はないように思われる。

「解説」は原則として編集委員会からの執筆依頼によるが、会員からの投稿も掲載している。内容の目指すところは“気象学の最新の成果や関連する分野の興味深い話題をわかりやすく説明する報文”であるが、現状は合格点とは言い難い。難解とか話題が偏っているとの批判を耳にすることもある。

「気象談話室」は原則として「教育と普及」委員会からの依頼原稿であるが、会員からの積極的な投稿も歓迎している。「論文」や「解説」とは異なり、気楽に読める読み物として「天気」の新しい目玉を目指しての登場であったが、まだ所期の目標には程遠い状態である。

その他91年以来内容充実を目指した変更は、

- ①「月例会」の発展として学会主催の会議や研究会の報告を掲載する「研究会報告」の新設、
 - ②「日々の衛星画像」が諸般の事情で中止されたことの代替として、「新刊図書案内」による気象関連の図書情報の提供、
 - ③「News」の内容にオゾン層やエルニーニョの情報も加えた「気候情報」の新設、
 - ④会員からの学界関連の情報や話題の提供を掲載する「情報の広場」の新設
- などであり、様々な工夫が加味されている。

以上が現在の天気の内容の概略である。これに対し山岸会員は、特定分野（具体的には天気予報関係）

の論文・解説・評論等を掲載する部分を設けることを提案している。この提案は諸外国の先例を参考にして、「天気」の誌面を借りて第3の雑誌の芽を育てることを意図しているように思われる。

また特定分野として予報関係を選択しているのは、すでに会員となっている予報士のみならず、潜在的な会員としての予報士も対象に誌面を魅力的に充実させることを狙った提案と考えられる。もしこの提案どおりの具体化が行われれば、たいへん結構なことである。しかし編集委員会での討議では時期尚早という慎重論が大勢を占めた。以下にその理由をかいつまんで述べる。

- ①編集委員はいわゆるボランティア的な存在であり、要求される仕事量から判断して特定分野にかかわる委員の委嘱がかなり困難である。
- ②現在の予報士のレベルの幅はかなり大きく、その裾野までの読者を対象とするのは学会機関誌に相応しくない。提案を本気で実現するには、新たなジャーナルを創刊することが得策ではないか。その場合には、気象協会発行（気象庁監修）の「気象」との競合が問題であろう。
- ③気象庁内には測候時報や研究時報や技術情報関係の資料が存在する。学会員でない職員にも職務上必要な情報はこのような媒体を通して提供することは組織として当然のことである。一方気象庁のかなりの数の職員が学会員であることは、これら

の職員が学会誌からも必要な情報を期待していることを反映しているといえよう。「天気」と測候時報や研究時報などの目的と内容とではかなりの相違があるが、一方ではかなりの重複部分もあるように思われる。これら出版物と「天気」とがどう住み分けるかは難しい問題である。

- ④「天気」は気象予報士を特別に意識して編集すべきでないことは言うまでもない。しかし山岸提案では特定分野には数ページを割り当てるとしているので、学会員の理解は得られるかもしれないが、さらに慎重な検討が必要である。

以上のような観点から、山岸提案を即刻実施するのは時期尚早であり、その趣旨を生かした記事を充実させることから始めるのが妥当というのが現在の編集委員会の見解である。その延長線上で山岸提案が実現できるような努力を重ねていくことが必要と認識している。その他にも会員からの身近で興味ある現象についての報文や編集委員会からの読者との会話を含む形で充実させること、普及講座的なものの継続的な掲載（尻切れトンボにならないような配慮とそれなりの準備が必要）などを検討している。これまでも編集委員会としてはそれなりの努力をしているが、その要請に応えての執筆など会員各位のご協力を改めて要請したい。

最後に、山岸会員の提案と編集委員会の見解に対して、多くの会員からのご意見を期待している。

（「天気」編集委員長 関口理郎）